

報告

盲ろう者の情報補償

—第 22 回全国盲ろう者大会に参加して—

兵庫県立福祉のまちづくり研究所 研究第一グループ
大西 俊介・中園 正吾

1. はじめに

平成 25 年 8 月 23 日(金) から 25 日(日) までの 3 日間、千葉・幕張メッセ国際会議場にて、全国盲ろう者大会が行われた。

盲ろう者とは、視覚及び聴覚に障害を持つ者を表すが、その障害程度により 4 分類される¹⁾(表 1)。

また、各障害を受障した時期により、表 2 に示すように 4 分類される場合が多い²⁾。

さらに、文献によっては、中途盲ろうの内、特に老年期に受障した人を区別して、加齢に伴い、難聴や白内障など疾病によって盲ろうとなった場合の「加齢による(老年)盲ろう」を加える場合もある³⁾。

表 1 障害の程度による分類

全盲ろう	全く見えない・全く聞こえない
盲難聴	全く見えない・聞こえにくい
弱視ろう	見えにくい・全く聞こえない
弱視難聴	見えにくい・聞こえにくい

表 2 障害の受障時期による分類

先天盲ろう	先天的に、或いは乳・幼児期に視聴覚の両方に障害を持った場合
盲ベース盲ろう	先天的に、或いは乳・幼児期に視覚に障害を持った人が、乳・幼児期以降、聴覚にも障害を持った場合
ろうベース盲ろう	先天的に或いは乳・幼児期に聴覚に障害を持った人が、乳・幼児期以降、視覚に障害を持った場合
中途盲ろう	乳・幼児期、視覚・聴覚に障害を持たなかった人が、それ以降の時期、視覚聴覚の両方に障害を持った場合

この大会は 22 回目を迎え、盲ろう者・盲ろう児とその家族、通訳・介助員及び盲ろう教育・福祉関係者等が一堂に会し、年 1 回の情報交換を行い、我が国の盲ろう福祉のあり方について討議するとともに、通訳・介助技術のいっそうの向上を図る機会とし、もって社会福祉の増進に寄与することを目的とされている大会である⁴⁾。

本大会では、9 つの分科会が開催され、別の会場では、機器展示、商品の販売コーナーも開設されていた。

現在我々は、単身生活を送る盲ろう者の自立生活支援として防犯、防災及び情報補償に関する研究⁵⁾をテーマとして掲げていることから本大会に参加し、特に感じた点について報告する。



図 1 会場の様子

2. 報告

2.1 通訳・介助員養成研修

今回大会の目玉であろうテーマとして、「よりよい盲ろう者向け通訳・介助員養成講座について考える」が第 6 分科会で行われた。

盲ろう者の抱える共通の困難としては、コミュニケーションの困難、移動の困難、情報入手の困難の 3 つをあげることができる。そして、どの場合においても盲ろう者が社会参加する際に必要になるのが、

兵庫県立福祉のまちづくり研究所

研究第一グループ

〒 651-2181 神戸市西区曙町 1070

兵庫県立総合リハビリテーションセンター内

通訳・介助員である。

平成 25 年 4 月 1 日から「盲ろう者向け通訳・介助員養成研修事業」⁶⁾ が地域生活支援事業の都道府県必須事業になったことから、盲ろう者向け通訳・介助員の養成研修会で使用する「盲ろう者向け通訳・介助員養成カリキュラム」及び「盲ろう者向け通訳・介助員養成研修会開催における留意事項等について」の概要説明と意見交換が行われた。

カリキュラムについては、目標時間を達成するのは現状では難しい様であるが、徐々に対応していく方針のようである。

受講生が集まらないことについては、点字サークル、手話サークルなど視覚障害、聴覚障害者向けのサークルなどへの積極的なアピールが必要であり、盲ろう者へ興味を持ってもらうことも必要である。

講師不足については、講師を盲ろう者も交流会等を通して一緒に育てていくことが必要である。

盲ろう者に係わろうとするすべての人は、盲ろう者との交流が不可欠であると言えよう。

2.2 情報補償と個人情報保護

大会や分科会に参加して以下のことを感じた。

- ・ 発表者に対して、当事者は後向きである。
- ・ 多くの当事者が、移動支援も含めて通訳を 2 名つけているので、参加者人数が多い(会場から溢れんばかり(図 1))。
- ・ 全く見えなくて聞こえない「全盲ろう」から見えにくく聞こえにくい「弱視難聴」までの盲ろう者だけではなく、視覚、聴覚のどちらか一方に障がいのある方も参加されており、コミュニケーション方法が混在している。
- ・ 触手話、弱視手話、指點字、音声での通訳がほとんどであり、情報が他人にまる見えである。
- ・ 言葉や音声も使いながら通訳される方が多く、騒がしく落ち着かない。
- ・ 約 1 時間の質疑応答を文字に換算すると 1,361 文字であった。会話の速度としては、NHK のアナウンサーの発話スピードが、毎分 300 ～ 350 文字と言われている⁷⁾。プレゼンや質疑応答でのスピードが遅いことに加え、通訳が必要であることから、それらの時間は盲ろう者以外に対応したものに比べ数倍の時間を要する。

健常者、聴覚障害者、視覚障害者、盲ろう者について、共通の知覚を得るための感覚機能としては、味覚、嗅覚、触覚になるが、現状では、触覚を利用することが多くなされている。

しかしながら、それらは通訳を介してなされている場合がほとんどであり、情報の伝達がいかに正確になされているか、また、第 3 者への個人情報保護がどれだけ厳密になされているかには疑問が残った。

3. おわりに

配布資料に同封された参加者名簿によると、今回の来場者は千人を超えた様子であり、介助・通訳を含め企画される方のご尽力がうかがえた。

盲ろう者への支援や研究においては、聴覚障害や視覚障害とはまったく別の障害であることを認識しなければならない。「人にやさしいまちづくり」を研究する我々は、課題に対して、あらゆる角度からの検討が必要であり、今後の各種研究に生かしたい。

盲ろう者は、全国で 14,329 人(2012 年度市町村調査 : 106 市町村回答の最新アンケート調査結果¹⁾(平成 18 年調査では、推定 22,000 人⁸⁾)と市場規模としては小さく、市場原理として専用の支援機器の充実は望めないであろう。

しかしながら、盲ろうという障害を考慮した一般商品のユニバーサルデザイン化を考えることで、さらにバリアフリーが進むのではないかと考える。単なるデバイスの完成ではなく、標準仕様の必要性、当事者のプライバシー確保、支援者(受講者、講師)を増やすためのモノとしての位置づけでのデバイスの提言が必要ではないかと考える。そのようなことから、さらに社会において、盲ろうについて認知されるようになれば良いものである。

来年の大会は、地元の兵庫県で開催されるそうであり、我々の研究成果⁵⁾が盲ろうの方への一助になるよう尚一層精進したい。

【参考資料】

- 1) 社会福祉法人全国盲ろう者協会 : 盲ろう者のしおり 1998 (1998, 3)
<http://www.dinf.ne.jp/doc/japanese/resource/blind/z02002/z0200201.html>

- 2) 重複障害者（盲ろう者）の就業の実情に関する研究調査推進委員会：重複障害者（盲ろう者）の就業の実情に関する研究調査，（独）高齢・障害者雇用支援機構，平成 17 年度：研究調査報告書，通刊 260 号，1-3，2007.
- 3) 寺島彰：盲ろう者に対する障害者施策のあり方に関する研究 _平成 11 年度 総括・分担研究報告書. 厚生労働科学研究費補助金障害保健福祉総合研究事業，105-108，2000.
- 4) 社会福祉法人全国盲ろう者協会
<http://www.jdba.or.jp/>
- 5) 大西俊介，杉本義己：盲ろう者の自立生活支援のためのインターフェイスと支援機器に関する研究，兵庫県立福祉のまちづくり研究所報告集 平成 24 年度，105-108，2012.
- 6) 厚生労働省：盲ろう者向け通訳・介助員の養成カリキュラム等について，障企自発 0325 第 1 号，2013.
- 7) NHK アナウンサールーム Q&A 「NHK のアナウンサーの話す速度はどれくらいですか」
<http://www9.nhk.or.jp/a-room/qa/>
- 8) 厚生労働省：平成 18 年身体障害児・者実態調査結果，2008.